

二年乙丑の春三月、三香原の離宮に幸せる時

に、娘子を得て作る歌一首 并せて短歌

笠朝臣金村

五四六番

三香の原 旅の宿りに 玉梓の 道の行き逢ひに

天雲の 外のみ見つつ 言問はむ よしのなけれ

ば 心のみ むせつつあるに 天地の 神言寄

せて きたへの 衣手かへて 自妻と 頼める

今夜 秋の夜の 百夜の長さ ありこせぬかも

反歌

五四七番

天雲の 外に見しより 我妹子に 心も身さへ

寄りにしものを

五四八番

今夜の 早く明けなば すべをなみ 秋の百夜を

願ひつるかも